Jap. Dic., 375 (1926). 9) 宮部: 植研誌, **24**: 2 (1949). 10) 鹿野: 東南亜細亜民族學, 先史學研究, **1**: 298 (1940). 11) Roxburgh: Flora Indica: 120 (1874); Watt: Comm. Prod. Ind., 640, (1908). 12) 馬淵: 新亜細亜, **4**, 3 月號, 136 (1942). 13) Monier-Williams: Sanskrit-Eng. Dic., 847 (1899). 14) Watt: Comm. Prod. Ind., 845 (1908). 15) Burkill: Dic. Econ. Prod. Malay Penn., 1999 (1935). 16) Sternberg: *Anthropos*, **24**: 755 (1929); Sayce (坪井譯): 未開民族の文化: 32 (1942). 17) 松本: 古代文化論, 現代史學大系, **10**: 99 (1932). 18) 三品: 日本の黎明, 京大日本史, **1**: 21 (1951).

(通産省大阪工業試驗所精油研究室)

○イチシとイタドリとの關連 (前川文夫) Fumio MAEKAWA: Etymological notes on Japanese names of *Rumex*, *Reynoutria* and *Patrinia*.

最近牧野博士は混々錄 No. 11 (1952) を久々に再刊されて大いに氣を吐かれたが, その中にイチシの語源についても亦新見解を述べておられる。(同誌: 204—208) 一體イチシとは何か, 壹師の花とも書き萬葉集 11 卷の「みちのべのイチシノ花のいちじろく(灼然), 人みな知りぬ吾が戀づまは」の歌に殘つているだけで外には何も手掛りが殘つていないため, いまだに正體がいろいろと詮議されている植物である。もつとも現存六帖に「立つ民も衣手白しみちのべのイチシの花の色にまがえて」の歌もあるが, これはイチシの花を白い花とした上での使用だから直接の解決には使えない。

從來のイチシの本體を示す植物としてはいちじろくを白色と取り, 白い花を連想してクサイチゴ (仙覺抄, 小清水氏), エゴノキ (白井博士), そして別に羊蹄 (シ) の花即ちギシギシの花 (八雲御抄, 啓蒙, 大言海など) を宛てゝいるが, どうもぴつたり來ない。牧野博士は灼然から赤色を, そして赤色の花で眼覺める許りのものとしてヒガンバナを想起し, 大和の地名市磯 (イチシ) の池をも織り込んで確信を以て主張されている。私はこれにも亦釋然としない。それで從來から得ていた考えを述べて御批判を得ようと思う。私の結論をいえば, **イチシはイタドリである**。そしてこの名は當時既に存在していた幾通りかの他の植物名と共通の構成內容を持ち, その命名動機も亦同じような基盤即ち生活の中に大きく位置を占めた利用價値の上に立つていたとの線に沿つて展開が試みられたのである。

イチシは恐らくイチ+シの二語の合成であろう。この事は廣義のシなる植物群をイチの區別用語を冠して分類し識別したところに出發する。シは古く羊蹄の文字を宛てたが, 食用とする點から *Rumex* (主としてスイバ, ギシギシ) の黃色の太い根莖を持つものを指した。これをどうしてシといつたかは推定の範圍だが, 酸味に富む若葉を持つ根莖を重點にしてスノネ (酸之根) にはじまり, シノネと轉じ, 逆に植物名に根の名がついたものと錯覺されてこの植物群がシとなつたのであろう。シドネ→シドウ→スイトウ (關

西）及シイトウ（岡山）の變化は上述の語源を傳える殘渣と思われる。

このシを基礎にする植物名にスシ（スイス），オホシ（ダイオウ），キシ又はギシ（ギシギシ），ナベシ（オミナエシとオトコエシ），タジ又はタチ（イタドリ）タケシ（備中方言，イタドリ）がみられる。最後のもの以外は今は滅びて用いられないがタジにはタジナとして備中の海岸に殘つている變形がある。

スシは酸味の强いシであり若芽の食用から來ている。オオシは渡來の藥草で，恐らくその藥効の偉大さが唱えられているのであろう。巨大な根莖であることも關係があろう。キシ又はギシは今はギシギシの反復の形をとるが，これは近世に民俗語源說の說くところの子供が葉をこすつてぎしぎし音を出すというのへこじつけたもので，キ又はギは即ち靈氣，靈力から轉じてそれを荷いそれを示すものに轉じ，氣の毒や氣が知れぬの氣ともなり，サナギ（蛹）はカイコのマユからみてサネ（核）＋ギ，則ちマユの核でしかもさわれば動く生きた核であることからきているし，さらに澱粉を口で嚙んで酒にしたその靈力を唾液に感じて唾液がキとなつた。ギシギシの若芽では若葉の葉鞘が目立ち，しかもその葉鞘の口にぬるぬるの唾液樣のものが必らず出ているのは食用とした當時によい目じるしになつたであらう。それでキ（唾液）を出すシでキシ又はギシである。ナベシは並ベシである。恐らく（ミナベシ（實，並ベシ）であろう，*Rumex* のシは一般にひらひらした縱長い穗をつける。ひらひらは蕚片の宿存したものだが當時としてはそんな細かい形態學上のことは勿論認めないだろうが，ひらひらした穗は充分に印象的であつた。永く殘るその穗はその根元に次の若い芽を見出させる目標である點で注目されてよい。然るにオトコヘシの類もひらひらしたものをつけた穗を立てる。ひらひらは小苞であるがこれも印象が主となる。穗は平頂で押し並べて水平にひろがつて群がつているのはシと全然異なるよい特徵でシの一般型と截然とわかちうる。たゞ單なる觀賞用にしかならぬものが名を當時えていたことはまことに腑に落ちないが次の植物の名からナベシの總稱名と何等かの利用ありしこととを想起できよう。ナベナという炭燒きなどの入つた谷すぢの開出地に多い草はこのオトコエシ類と莖葉の概形が類似し，同時に若芽を食用にする。ナベナは多分ナヘシナの短縮化であつて，ナベシに似て食用になる野草の意味を今に殘した名を持つていることになる。この事は何等かの理由で，例えば食物の醱酵等に關連してナベシが曾つて利用されていたことがあつたことの可能性を見出させるものである。萬葉集にはすでに花の美しさから黃色のものにオミナベシ轉じてオミナメシの名がある。ミナベシの發音がオミナ（女）の連關を生じさせ，やがてそれに對するものとしての白花にオトコ（男）を別につけるに到つたのは平安に入つて觀賞が徹底しはじめた頃でもあろうか。タケシは竹シで大きい幹は竹の連想を，太い芽生えは筍を連想するに充分でありこれが名の起りであろう。以上のように植物名としてのシを語尾に有する一群がありイチシも亦同類でイタドリであるとすると甚だ滑らかな解釋なるのはこの考え方が妥當である第一の證である。

殘りのイチシとタジ（タチ）との連絡は次の比較の中に容易に見出されよう。

	イチシ	
	タチ	····古　語　タジヒノハナ。神話にでる。タジナは岡山縣にのこる。
	タジ	····〃
	イタヅ	リ····倭名抄にでる。現行名はこれからずれたもの。
サ	イタヅ	マ····古歌にでる。富士山麓板妻は富士に多いオノエイタドリの群生から來た地名であろう。
サ	イタ(ナ)	····周防大島方言　ナは榮で附加したもの。

タジ以下はみな完全にイタドリを指す。そして多少の變化は被つているとはいえ框内の三文字の驚くべき一致を見ればイチシがまずイタドリを示すとする第二の證になるであろう。

さてイチはチチ (乳) でありチ (血) である。古代日本の人達の思想では乳と血とは身體から出るキの一つである。乳で子供は育ち，血がでるときを失つて命を落とすからである。イチのイは接頭語にすぎない。チチとは觀念上は同じものであつたはずだがその異なる屬性のどれを重點とみるかによつて全く異なるものを示す區別用語にも用いられている。イチガシ（イチイガシで胚乳をすりつぶして澱粉をとる），イチジク（イヌビワの古語，甘い乳液を出す），イタヤギ（白山の麓に殘る方言でイタヤニギ，イタヤカエデのことで樹幹を傷つけて砂糖の汁をとる）イタビ（乳＋實で甘い實と白い乳液のでることは正に乳である）のイチ又はイタは乳の甘味，と白色に連關を求めているし，イチビコ（キイチゴ類の古名，これは甘さの外に血の赤さが多く導入されていよう。イタドリは若くて太い芽立ちを食用にするがこれが甚だ赤い色素に富んでいて，スイバ，ギシギシの綠色と鮮明に區別ができる點に，イチシの名の語源（即ち血の如く赤いシ）があるとみたい。即ち血の方への關連である。イチシの花とは眞の花というよりも恐らく果實の時であろう。イタドリのあの盛んな實のつき方をみれば花とみまがうであろう。即ち白い宿存蕚が三翼をなして擴大し，無數にひらひらついた有樣は，乳の白さを充分に思わせるシの仲間であることを示している。從つてイチシの語源をがくの白さにしても差支えないが私は利用面から筍狀の若芽の赤さを識別點にしたとの見解をとりたい。これはイチシを以てイタドリとすることを區別の用語の用法上からも，又植物の形質上からも共に妥當であることを示すもので第三の證明である。イチシからイタドリになつた間に頭にも尾にも餘計な字（たとえばサやリなど）がついて來たが恐らく最初の命名意義が社會情勢の變化で忘失された後，民俗語源的の第二次附會が增訂した部分であろう。それと同時に地方には現在でもイの字が脱落せずにいるのに中央では神話を口傳からやつと文字に記錄した時代に於てすでにイの字の脱落を見ていることは言葉の進化の發祥を示すもので，語源探及上に大きな手掛りを與えるものと思われる。